

緒方亮平の世界

2015年9月16日(水) – 11月29日(日) 会場：常設展示室

※月曜休館 ただし9月21日(月)、24日(木)、10月12日(月)、11月2日(月)、23日(月)は開館、10月13日(火)、11月24日(火)は休館

※ギャラリートーク (会期中の第3金曜日 9月18日 午後1時、10月16日、11月20日 午後2時より)

緒方亮平(1901-1979)は、昭和期に日展、光風会を中心に中央画壇で活躍した福山出身の洋画家である。

およそ50年にわたる画業のなかで、モチーフとしては、おもに自宅の庭や室内をはじめ、人物、静物、そして生まれ故郷である鞆の浦を中心にした瀬戸内海の島々、港などの風景を描いたものが多くみられる。

画風は、抽象絵画など、当時の前衛的な美術に向かうことはなく、例えば、静物においても身近にあるバラの花々などを、色彩豊かに美しく描くことに人生を捧げた画家といえる。

また、先の大戦は、鞆に疎開し、東京に戻った後もたびたび帰郷し、郷里の後進の指導にあたるなど、福山周辺の洋画家たちの育成にも努めた。

このたびの所蔵品展は、ご遺族より昨年受贈した当館所蔵品を中心に、個人所蔵家や福山市鞆の浦歴史民族資料館寄託作品などを合わせてご覧いただくものである。

画家への道

緒方亮平は、1901(明治34)年、広島県沼隈郡鞆町(現・福山市鞆町)に北山恒治つねじの次男として生まれる。本名は、勝(まさる)で、父恒治は材木商を営んでいた。

1914(大正3)年、13歳の時に母の家を継ぐため、緒方姓となるが、小さい頃から病弱であった為、中学校へ進むのを断念せざるを得なかったようである。しかし、幼少より絵が好きだった緒方は、1920(大正9)年、兄の勧めで上京する。知人の紹介から本郷洋画研究所に入り岡田三郎助(1869-1939)に師事するとともに、その書生となる。緒方は、後年に当時の暮らしと岡田との出会いを、「本当に恵まれていた⁽¹⁾」と述べている。

緒方の回想によれば、「別に画家になろうって気はなかった。当時絵かきは道楽者と言われていたが、自由に旅でも出来れば⁽²⁾」というのが動機だったようである。また、「そのころの東京は非常によかった。都会でありながら、素朴さがあった。カフェなんか2、3軒回って何時間いてもいやな顔一つしないし、詩人や音楽家たちと飲んで議論し合った。勉強が出来る雰囲気だった⁽³⁾」と述べている。

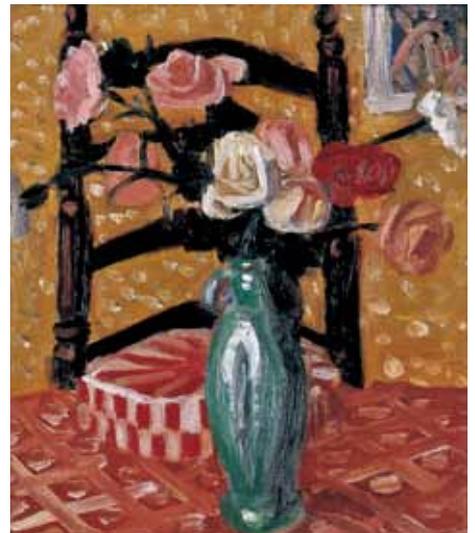
1923(大正12)年は、関東大震災に見舞われ、帝展開催が見送られた年であったが、日本美術展覧会に緒方勝の名で《自分の室から》(no.1)を出品した。画面には、ランプや鉄瓶など日用品に加えて、パレットや筆洗器など画家らしいモチーフも配置されている。構図や筆触、青味を帯びた暗い彩色など、ポール・セザンヌや印象派風の表現が試みられている。

1927(昭和2)年、26歳の時、第8回帝展で《室内裸婦》(no.2)が初入選する。椅子に腰掛けた裸婦像には、重厚なマチエール(絵肌)がみられる。研究所時代に修得した人物表現、とくに形態や明暗の調子などから量感を探求するため、執拗に何度も塗り重ねられていることがわかる。

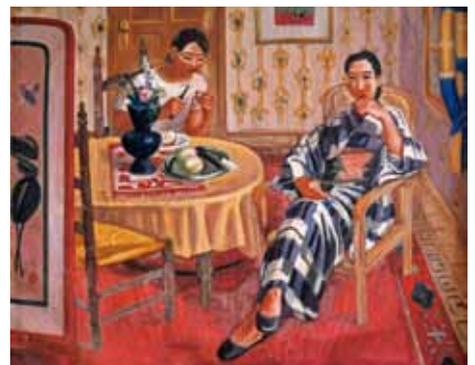
《花》(no.3)では、花瓶に活けられたバラの花を、素早い筆致で艶やかに描いている。背景には、赤い幾何学模様の箱や、椅子がモチーフとして取り入れられ、安定感を感じさせる。また、この作品が描かれた1933(昭和8)年、緒方は片山ティと結婚する。彼の温かい家庭を垣間見るような、明るい色調が印象的である。



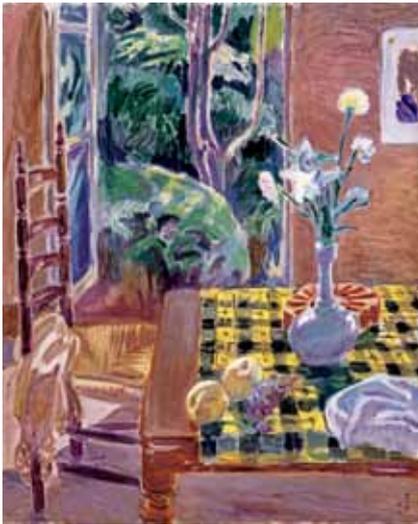
1.《自分の室から》1923年



3.《花》1933年 寄託



4.《室内》1934年 福山市鞆の浦歴史民俗資料館寄託



6.《室内》1952年



7.《室内》



10.《静物》



11.《風景》1953年

帝展で特選を受賞

1934 (昭和 9) 年、緒方 33 歳の時、第 15 回帝展に《室内》(no.4) を出品して特選を受賞し、一躍脚光を浴びる。同年には、光風会の会員に推挙されている。

画面は、テーブルを挟んで、果物の皮を剥く女性、手前には着物姿で椅子に腰掛けてくつろぐ女性が描かれている。

暖色を基調とした、温かな室内の雰囲気が醸し出された優品であるが、当時の作品評では、「よき調和を持たれて居るが、色の調和を余り気にしすぎて面白味がない。少々矢島 (堅土) 氏の影響があるが、氏には繊細な味が出て居る。矢島氏をドンスの味とするなら氏はユカタ地の味である。破綻はないが、もう一步この作品に作者の感情の働きがほしい⁽⁴⁾」と、いささか手厳しく批評されている。

1936 (昭和 11) 年、文展招待展で無鑑査品《画室にて》(東京国立近代美術館蔵) は、政府買上となる。が、この時の批評も「淡調、手際よく纏め、リリカル⁽⁵⁾」や、「エコール堅土 (矢島堅土) のぬむい無気力⁽⁶⁾」と同郷で 6 歳年上の洋画家、矢島堅土 (1895-1973) と比較され、緒方独特の開放感のある、伸びやかな筆触、叙情的な表現があまり評価されていないように見受けられる。

1939 (昭和 14) 年、38 歳の時、父と師・岡田三郎助が相次いで亡くなる。親からの援助に支えられていた緒方は、「僕は 40 歳になるまで親の仕送りで生活していたんですよ。それだけにこの年に父と師匠を一度に無くして精神的にまいった。それまでは絵を売る必要もなかったし…⁽⁷⁾」と率直な感想を述べている。

鞆へ疎開

1945 (昭和 20) 年、第二次大戦末期、緒方は家族とともに鞆へ疎開する。彼の回想談によれば、食糧から絵具まで統制され、「あのころが一番苦しかった。そのころの友人の一人が「君のデッサンがうまいのは、鞆時代に絵具が買えなくて鉛筆デッサンばかりしていたからだろう」⁽⁸⁾」と後年にまで冷やかされたことも披歴している。

戦後 20 年を過ぎて、口ぐせのように若い後進へ語ったとされる、「暖かいベッドに寝ていたのでは、いい絵は生まれない⁽⁹⁾」の言葉は、この頃に培われた人生観と考えられる。

この時期の緒方は、生まれ育った鞆の風景にあらためて魅せられ、仙酔島など、「白砂青松の美しい風景の見られる瀬戸内海の中でも、このようなまとまりのある美しさはあまり見られないのではと思う。ちょうど前に横たわっている弁天島の朱塗りの二重のお堂などは実に心にくいまでにこの景観の急所について、まさに画竜点睛の感がある⁽¹⁰⁾」として、繰り返しスケッチをしている。

彼は、鞆の風景について、「鞆に生まれて鞆に育ち、戦後又鞆に生活して来た私なりに絵の良し悪しは別として、鞆の風景を知るといふ点では一応自負を持っている⁽¹¹⁾」とし、「僕はこの風景の中で生まれ、そしてこの風景が僕を育ててくれたのだ。僕はこの郷土の風景を新しい解釈で取りあげて見ようと思っている⁽¹²⁾」と語っている。

《室内》(no.6) は、緒方が 51 歳に制作した作品である。《室内》(no.7) も構図や色調から同時期に制作したものと考えられる。

画面では、窓越しに見える庭の木々が、季節の移ろいや静寂を感じさせるとともに、奥行や広がりを与えている。さらに構成も巧みで、花瓶に活けられた花へ自然と視線が注がれるように配置されている。

身近な日常身辺を題材にした、モチーフの構成や平面的で装飾的な彩色は、フランスの画家、ピエール・ボナールやアンリ・マチスと通底するものを感じさせる。

《静物》(no.10)、《風景》(no.11) も、この頃に制作したものである。画面の茶系を基調とした彩色や筆触には、岡田の逝去後に師事した、辻永 (1884-1974) の影響がみられる。

1947 (昭和 22) 年の春、「福山産業復興博覧会」が開催される。戦災で焼失した福山城天守閣跡に、仮設でバラック造りの美術館が立てられて、戦後最初的美術展が開催された。

出品者のなかには、緒方をはじめ、光風会の清水良雄 (1891-1954)、戸塚孝三郎 (1907-1965)、

緒方亮平 略年譜

1901 (明治 34)年 3月 19日、北山恒治、タツの次男として
 鞆町に生まれる。本名、勝。
 母方の家を継ぐため、緒方姓となる。
 1914 (大正 3)年 13歳 本郷洋画研究所で岡田三郎助に師事。
 1920 (大正 9)年 19歳 日本美術展覧会 《自分の室から》(no.1)
 1923 (大正 12)年 22歳 出品。
 1927 (昭和 2)年 26歳 第8回帝展《室内裸婦》(no.2) が初入選。
 1928 (昭和 3)年 27歳 第9回帝展《A子の像》。光風会第15回展、
 光風賞受賞。
 1930 (昭和 5)年 29歳 第11回帝展《二人像》。光風会第17回展、
 光風賞受賞、新会友。
 1931 (昭和 6)年 30歳 第12回帝展《二人の女》。
 1933 (昭和 8)年 32歳 第14回帝展《室内》。片山テイと結婚。
 1934 (昭和 9)年 33歳 第15回帝展《室内》(no.4) 特選。光風会第21回展、新会員。
 1935 (昭和 10)年 34歳 父病気のため、尾道に滞在。(秋から約10ヶ月)
 1936 (昭和 11)年 35歳 文展招待展、無鑑査品《画室にて》政府買上。光風会第23回展、
 評議員。
 1938 (昭和 13)年 37歳 第2回新文展《静物》。
 1939 (昭和 14)年 38歳 第3回新文展《閑日》。父と師、岡田三郎助が逝去。
 1940 (昭和 15)年 39歳 この頃より辻永に師事。
 1942 (昭和 17)年 41歳 第5回新文展《庭》。
 1943 (昭和 18)年 42歳 第6回新文展《七面鳥》。《日の丸の旗をもった母子》を制作。
 1944 (昭和 19)年 43歳 戦時特別展《送る朝》。
 1945 (昭和 20)年 44歳 鞆に疎開。(昭和28年まで)
 1950 (昭和 25)年 49歳 第6回日展《静物》、依囑。
 1951 (昭和 26)年 50歳 第7回日展《瀬戸》、依囑。



1952 (昭和 27)年 51歳 第8回日展《室内》(no.6)、審査員。
 1953 (昭和 28)年 52歳 東京の自宅に戻る。
 1954 (昭和 29)年 53歳 第10回日展《港》(no.12)、依囑。光風会第40回展、審査員。
 1955 (昭和 30)年 54歳 第11回日展《海に見える室》(no.13)、依囑。
 1956 (昭和 31)年 55歳 第12回日展《柿ノ木のある庭》、依囑。光風会第42回展、審査員。
 1957 (昭和 32)年 56歳 光風会第43回展、審査員。
 1958 (昭和 33)年 57歳 第1回日展《鞆の浦風景》(no.15)、会員。光風会第44回展、審査員。
 1959 (昭和 34)年 58歳 第2回日展《南の室》、会員。光風会第45回展《庭》、審査員。
 1960 (昭和 35)年 59歳 鞆へ一時帰郷(約2年間)。
 1962 (昭和 37)年 61歳 第5回日展《庭》、会員審査員。光風会第48回展、審査員。
 1963 (昭和 38)年 62歳 第6回日展《港》(no.17)、光風会第49回展《鞆の港》、審査員。
 1964 (昭和 39)年 63歳 第7回日展《船着場》、光風会第50回展、審査員。
 1965 (昭和 40)年 64歳 第8回日展《内海風景》、光風会第51回展、審査員。
 1966 (昭和 41)年 65歳 第9回日展《道越風景》(no.19)、会員審査員。
 光風会第52回展、審査員。
 1967 (昭和 42)年 66歳 第10回日展《港》、評議員。光風会第53回展、審査員。
 1968 (昭和 43)年 67歳 第11回日展《柿ノ木のある風景》、評議員。光風会第54回展、審査員。
 1969 (昭和 44)年 68歳 改組第1回日展《鞆風景》、評議員。光風会第55回記念展、審査員。
 1971 (昭和 46)年 70歳 改組第3回日展《南の室》(no.20)、評議員。
 光風会第57回展《T子像》、審査員。
 1972 (昭和 47)年 71歳 改組第4回日展《紫陽花》(no.21)、会員審査員。
 光風会第58回展、審査員。
 1974 (昭和 49)年 73歳 改組第6回日展《二人像》、会員審査員。
 光風会第60回記念展、審査員。
 1976 (昭和 51)年 75歳 日展参与となる。
 1979 (昭和 54)年 78歳 8月20日、逝去。

第1室 緒方亮平の世界

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	寸法 (cm)	所蔵 (※空欄は当館所蔵)
1	緒方亮平	(1901-1979)	自分の室から	1923	油彩、カンヴァス	45.5 × 53.0	
2	緒方亮平		室内裸婦	1927	油彩、カンヴァス	145.5 × 130.3	福山市鞆の浦歴史民俗資料館寄託
3	緒方亮平		花	1933	油彩、カンヴァス	53.4 × 45.7	寄託
4	緒方亮平		室内	1934	油彩、カンヴァス	158.0 × 194.0	福山市鞆の浦歴史民俗資料館寄託
5	緒方亮平		内海風景	1951	油彩、カンヴァス	37.9 × 45.5	個人蔵
6	緒方亮平		室内	1952	油彩、カンヴァス	100.0 × 80.3	
7	緒方亮平		室内		油彩、カンヴァス	133.0 × 100.0	
8	緒方亮平		静物		油彩、カンヴァス	37.6 × 45.6	個人蔵
9	緒方亮平		ざくろ		油彩、カンヴァス	24.3 × 33.3	個人蔵
10	緒方亮平		静物		油彩、カンヴァス	38.2 × 45.8	
11	緒方亮平		風景	1953	油彩、カンヴァス	31.9 × 41.3	
12	緒方亮平		港	1954	油彩、カンヴァス	99.5 × 80.5	福山市立鞆小学校蔵
13	緒方亮平		海に見える室	1955	油彩、カンヴァス	134.5 × 100.5	
14	緒方亮平		鞆港	1955 頃	油彩、カンヴァス	24.3 × 33.4	
15	緒方亮平		鞆の浦風景	1958	油彩、カンヴァス	100.9 × 134.0	
16	緒方亮平		内海風景	1960	油彩、カンヴァス	37.9 × 45.5	
17	緒方亮平		港	1963	油彩、カンヴァス	132.1 × 100.0	
18	緒方亮平		鞆の港	1963	油彩、カンヴァス	45.5 × 53.0	
19	緒方亮平		道越風景	1966	油彩、カンヴァス	80.3 × 116.8	福山市鞆支所蔵
20	緒方亮平		南の室	1971	油彩、カンヴァス	145.5 × 112.2	
21	緒方亮平		紫陽花	1972	油彩、カンヴァス	130.2 × 97.0	
22	緒方亮平		風景		紙、鉛筆、水彩	15.1 × 21.0	
23	緒方亮平		花		紙、鉛筆、水彩	23.6 × 17.3	
24	緒方亮平		あじさい		紙、鉛筆、水彩	25.1 × 18.0	
25	緒方亮平		関の浜にて		紙、鉛筆	18.0 × 25.2	
26	緒方亮平		メラストマ		紙、鉛筆	18.0 × 25.2	
27	緒方亮平		蓼科		紙、鉛筆	18.0 × 25.2	
28	緒方亮平		港		紙、鉛筆	25.2 × 18.0	
29	緒方亮平		風景		紙、鉛筆	18.0 × 25.2	
30	緒方亮平		港		紙、鉛筆	18.0 × 25.2	
31	緒方亮平		道越風景		紙、鉛筆	18.0 × 25.2	
32	緒方亮平		牛窓		紙、鉛筆	18.0 × 25.2	
33	緒方亮平		田島馬場崎		紙、鉛筆	18.0 × 25.2	
34	緒方亮平		イシモチ (イシカニ)		紙、鉛筆	17.7 × 25.0	
35	緒方亮平		ねずみ		紙、鉛筆	21.8 × 28.2	
36	緒方亮平		静物		紙、鉛筆	21.0 × 30.0	
37	緒方亮平		メバル		紙、鉛筆	21.0 × 30.0	
38	緒方亮平		バラ		紙、鉛筆	30.0 × 21.0	

第2室：日本の近現代美術

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	寸法 (cm)
39	高橋秀	(1930-)	ブルーボール# 101	1971	油彩,カンヴァス	142.0×190.0
40	巖嘔	(1931-)	Violin on the chair	1967	油彩,木	75.0× 45.0 ×50.0
41	山口長男	(1902-1983)	壺形	1959	油彩,合板	183.0×274.0
42	岸田劉生	(1891-1929)	橋	1909	油彩,カンヴァス	33.6× 45.7
43	岸田劉生		静物 (赤き林檎二個とビンと茶碗と湯呑)	1917	油彩,カンヴァス	33.7× 45.8
44	岸田劉生		新富座幕合之写生	1923	油彩,カンヴァス	31.9× 41.0
45	岸田劉生		麗子十六歳之像	1929	油彩,カンヴァス	47.2× 24.8
46	吉田卓	(1897-1929)	自画像	1919	油彩,カンヴァス	33.0× 23.5
47	小林徳三郎	(1884-1949)	花と少年	1931	油彩,カンヴァス	53.1× 65.0
48	南薫造	(1883-1950)	夏	1919	油彩,カンヴァス,板	45.7× 38.0
49	安井曾太郎	(1888-1955)	手袋	1943-44	油彩,カンヴァス	89.3× 72.8
50	須田国太郎	(1891-1961)	冬の漁村	1937	油彩,カンヴァス	48.5× 59.7
51	林武	(1896-1975)	妻の像	1927	油彩,カンヴァス	90.9× 72.7
52	小磯良平	(1903-1988)	婦人像	1969	油彩,カンヴァス	52.0× 44.0
53	熊谷守一	(1880-1977)	女の顔	1931	油彩,板	41.0× 32.0
54	橋本関雪	(1883-1945)	暖翠		絹本着色	42.0× 57.0
55	大村廣陽	(1891-1983)	秋陽留鳥		絹本着色	128.0× 42.5
56	大村廣陽		狗子と鶏頭		絹本着色	147.5× 50.5
57	大村廣陽		秋涼山水図		絹本着色	130.0× 28.5
58	塩出英雄	(1912-2001)	露地	1973	紙本着色	173.7×242.1
59	高松次郎	(1936-1998)	形 (No.1201)	1987	油彩,カンヴァス	218.0×182.0
60	松本陽子	(1936-)	ペイルシエバの荒野	1990	アクリル,カンヴァス	200.0×250.0
61	野田弘志	(1936-)	ガラスと骨Ⅱ	1990	油彩,アクリル下地,カンヴァス	146.0×112.0
62	中川直人	(1944-)	アフリカの女王	1982	アクリル,カンヴァス	150.0×178.0
63	堀内正和	(1911-2001)	線C	1954	鉄,セメント	45.0× 78.0 ×46.0
64	土谷武	(1926-2004)	植物空間VI	1990	鉄	64.0× 57.5 ×41.5
65	平櫛田中	(1872-1979)	寿星	1962	木,彩色	47.0× 41.0 ×28.0
66	北大路魯山人	(1883-1959)	金銀彩武蔵野鉢	1925-34	陶	15.2× 27.5 ×27.5
67	金重陶陽	(1896-1967)	一重切花入	1964	陶	20.0× 13.0 ×11.0

第3室：ヨーロッパ美術

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	寸法 (cm)
68	レオン＝オーギュスタン・レルミット	(1844-1925)	昼食の支度		パステル,紙	33.5× 41.5
69	ジュゼッペ・パルッツィ	(1812-1888)	羊飼いと羊の群れの風景	1870頃	油彩,カンヴァス	49.0× 72.0
70	ジョヴァンニ・セガンティーニ	(1858-1899)	婦人像	1883-84	油彩,カンヴァス	120.0× 87.0
71	ウジェーヌ・カリエール	(1849-1906)	腕組みの座る女		油彩,カンヴァス	46.0× 38.0
72	ジョルジュ・ルオー	(1871-1958)	ユピュ王	1939頃	油彩,カンヴァス	45.5× 68.5
73	ジャコモ・バッラ	(1871-1958)	輪を持つ女の子	1915	油彩,カンヴァス	51.0× 60.5
74	アンドレ・ドラン	(1880-1954)	婦人像	1925	油彩,カンヴァス	61.0× 73.8
75	ウンベルト・ボッチョーニ	(1882-1916)	カフェの男の習作	1914	油彩,カンヴァス	58.0× 46.0
76	モーリス・ユトリロ	(1883-1955)	酪農場	1916	油彩,板	51.0× 65.0
77	ソーニャ・ドローネー	(1885-1979)	色彩のリズム	1953	油彩,カンヴァス	100.0×220.0
78	クルト・シュヴィッターズ	(1887-1948)	抽象 19 (ヴェールを脱ぐ)	1918	油彩,厚紙	69.5× 49.8
79	メダルド・ロッソ	(1858-1928)	門番の女性	1883	ワックス,石膏	37.0× 30.0 ×17.0
80	ハンス・リヒター	(1888-1976)	ペルナスコーニ氏像	1917	油彩,カンヴァス	60.0× 47.0
81	ジョルジョ・デ・キリコ	(1888-1978)	広場での二人の哲学者の遭遇	1972	油彩,カンヴァス	80.0× 60.0
82	モーリス・ド・ヴラマンク	(1876-1958)	雪の風景		油彩,カンヴァス	45.0× 55.0
83	サンドロ・キア	(1946-)	少女	1981	油彩,パステル,紙,カンヴァス	194.0×150.0
84	ピエロ・マンゾーニ	(1933-1963)	アクローム	1961	小石,カンヴァス	70.0× 50.0
85	ペリクレ・ファッツィーニ	(1913-1987)	風 (踊り子)	1956-60	ブロンズ	139.0× 80.0 ×90.0

和室 松本コレクション「不二の山」

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	寸法 (cm)
86	飛来一閑 (盆)	(1578-1657)	烏帽子形盆石 カツラ盆添		石,漆	(高) 5.2× (幅) 44.2× (奥)26.5
87	樂旦入 (樂家 10代)	(1744-1818)	赤樂茶碗 不二の絵	江戸時代	陶	(高) 8.7× (口径) 12.0 (高台径) 5.4
88	坂倉新兵衛 (15代)	(1949-)	萩茶碗	2004	陶	(高) 6.5× (口径) 14.7 (高台径) 5.6
89	吸江斎	(1818-1860)	茶杓 銘 末広	江戸時代	竹	(長) 18.0 (筒長) 20.8

独立美術協会の片山公一（1910-1969）、二科会の北川実（1908-1957）、彫刻家の今城国忠（1916-2000）などがいた。

この美術展が契機となって、戦争により一時活動が途絶えていた、福山の洋画研究グループ「ぶらんだるじゃん」の活動も再開し、戦時下に一時的に結成されていた「葦陽美術会」が解散、同グループに合流するなど活性化し、佐々田憲一郎（1899-1995）ら郷土の画家たちに大きな刺激を与えることとなる。1948（昭和23）年には、「ぶらんだるじゃん」も発展的に解散、「福山美術協会」が組織され、今日に至る。

さらに戦時下の統制から解放された福山には、「福山勤労者美術協会」をはじめ、「松永美術協会」、「マチオラ洋画会」など、数々の洋画研究グループが生まれた。

緒方は、1953（昭和28）年、疎開を終えて東京の自宅に戻っている。ただし、鞆には戦後、彼の同級生を中心に組織された「九曜会」なる後援会の協力もあって、幾度も帰郷している。

鞆に取材した、《海の見える室》（no.13）、《鞆港》（no.14）、《鞆の浦風景》（no.15）などは、この時期に制作している。

1960（昭和35）年には、およそ2年間、鞆に長期滞在して、尾道の小林和作（1888-1974）とともに、戦後の福山洋画界を牽引した。

巴洋会（はようかい）

1960（昭和35）年、光風会の洋画講習会が、福山市立南小学校で催された。緒方をはじめ矢島堅土、渡辺武夫（1916-2003）らが講師を務め、鞆周辺から10人程の参加者がいた。

緒方は、参加者に洋画研究グループ結成を勧めた。これが巴洋会のはじまりであった。会の名称は、巴（ともえ）の形をした鞆の港と巴里（パリ）をかけたもので、緒方自身が命名した。

1963（昭和38）年頃には、対潮楼そばの木造家屋、肥後屋を借り切り、会員自らが改装した共同アトリエ網代（あじろ）を完成させた。最盛期には20人程の美術愛好家が集ったという。

この共同アトリエでの制作は、30年程続いた。このアトリエは、今日存在しないが、指導的な立場であった緒方は、会員に対して自身の画風を模倣するのではなく、それぞれの個性が作品に表われてくるのを望んだとされる。その活動や精神は、鈴木辰夫（1928-）ら地元の画家たちに今も息づいている。

《内海風景》（no.16）は、この頃に描かれたもので、カンヴァスの下地の色を生かした、透明感のある表現になっている。

光風会と福山

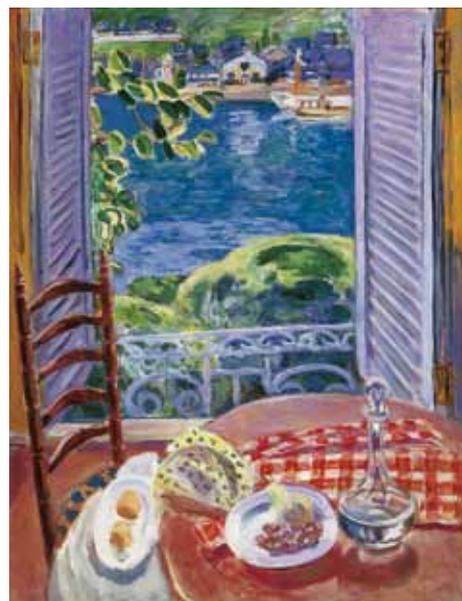
1956（昭和31）年、光風会の第1回広島展（福山会場）が、福山市公会堂で開催されている。光風会広島支部の設立は、はっきりとした記録がないものの、パンフレット等の資料から1964（昭和39）年と考えられている。

立ち上げ期の会員は、戸塚孝三郎、新延輝雄（1922-2012）、岡崎勇次（1924-1991）、藤井軍三郎（1910-2006）であった。

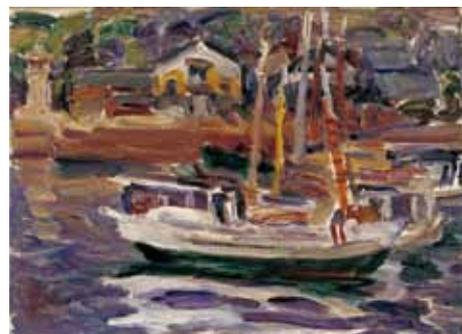
福山大空襲にあいながらも、復興途上の焼け残った公会堂での開催が危ぶまれていた中、緒方は、「小さな町は色々な面で恵まれない、特に洋画に至っては…それを補うには色々困難はあろうが必要なことだ⁽¹³⁾」と語ったという。その言葉に応えた関係者は、総動員で会場を美しく整え、無事開催を迎えたという。

1965（昭和40）年には、福山市立霞小学校で、光風会広島支部主催の夏季洋画講習会が開催された。講師として緒方と渡辺武夫が来て、8月初旬の暑い最中、汗だくでの指導をこなしたという。

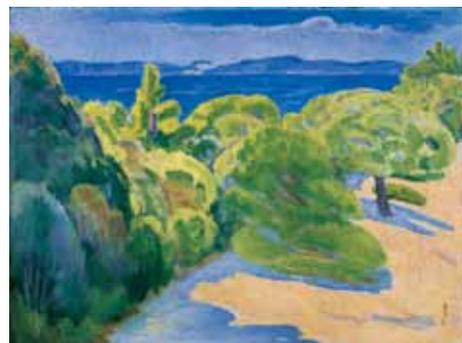
このように緒方は、戦後の福山の洋画の発展に尽力し、後進の育成にも貢献したのであった。



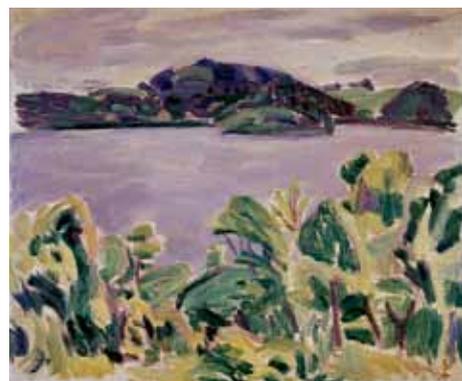
13.《海の見える室》1955年



14.《鞆港》1955年頃



15.《鞆の浦風景》1958年



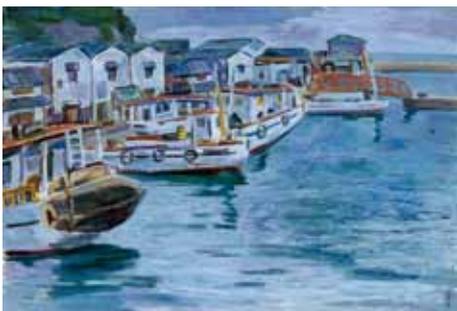
16.《内海風景》1960年



17.《港》1963年



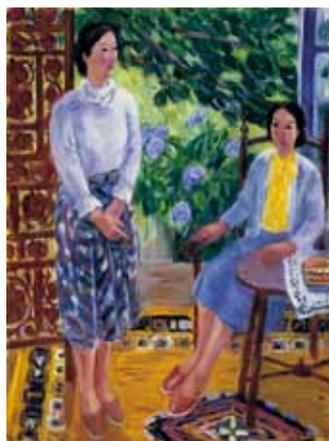
18.《船の港》1963年



19.《道越風景》1966年 福山市鞆支所蔵



20.《南の室》1971年



21.《紫陽花》1972年

画風の展開

緒方の画風を振り返ってみると、大きく5つの段階を経て展開したと考えられる。

まず、1920～30年の初期作品には、《自分の室から》(no.1)や《室内裸婦》(no.2)など、研究所時代の画技の修練がそのまま出品作にも色濃く反映して、色彩的に暗い色調となっている。

1930年代に入ると、第15回帝展出品の《室内》(no.3)にみられるように、純色にグレーを混ぜた柔らかみのある暖色を基調とした表現へと移行する。この頃の構図や配色などは、師の岡田三郎助、同郷の矢鳥堅土の影響が強くみられる。

緒方の流麗な筆触は、岡田の死後、辻永に師事した1940年代以降、風景画などに一際冴えをみせる。とくに1945～53年に鞆へ疎開してからは、生まれ故郷の瀬戸内海の美しい景観を再認識し、その気候風土に順応するかのように彩度も輝きを増してくる。

1960年代になると、《港》(no.17)、《船の港》(no.18)、《道越風景》(no.19)など、色彩の対比に大胆で明快な表現、直線的で素早い筆致がみられる。緒方の詩情画意を誘う独自の世界観に新たな広がりを見せている。

1970年代の円熟期では、《南の室》(no.20)、《紫陽花》(no.21)は、洗練された筆使いにより、淀みなく対象を描き出している。画面に描かれた桃や紫陽花など季節感溢れるモチーフも、清涼な室内の人物と呼応して、清々しい雰囲気醸し出し、昭和モダンの世界を揺るぎないものにしていく。

緒方の画風は、1930年代から70年代に至るまで、明るい色彩と穏やかで平明温和な表現がみられることから、変化がほとんど無いようにみられる。しかし、年代を追って作品をつぶさに見てみると、岡田から辻に師匠が変わった頃や、鞆に疎開して、周囲の環境がさま変わりするなかで、その表現も少しずつ変化していったことがわかる。

このように緒方の画風は、「倦まず弛まず、毎日描く⁽¹⁴⁾」という恩師、岡田の教えを忠実に守り、積み上げていくなかで伸展していったことがわかる。

(学芸員・主査 大前勝信)

註

- (1) 緒方亮平「自分の絵を大切に」『中国新聞』1969年9月23日(火)
- (2)、(3)、(7)、(8)、(9) 同紙
- (4) 橋本八百二「緒方亮平・作品評」『美術』1934年11月号『日展史11』日展史編纂委員会 1983年10月 553頁
- (5) 中村善策「緒方亮平・作品評」『アトリエ』1936年12月号『日展史12』日展史編纂委員会 1984年5月 505頁
- (6) 四宮潤一「緒方亮平・作品評」『阿々土』1936年12月号 同掲書 505頁
- (10) 緒方亮平「スケッチの旅①」『中国新聞』1962年3月21日(水)
- (11) 緒方亮平「スケッチの旅②」『中国新聞』1962年3月22日(木)
- (12) 緒方亮平「仙酔島と弁天島そして鞆港」『港町・鞆の津と画人展 一鎌田呉陽・緒方亮平一』福山市鞆の浦歴史民俗資料館 1993年10月 47頁
- (13) 守長雄喜「広島支部の歴史」光風会100回展記念特設サイト www.kofu-kai.jp/100/branches/hiroshima.html
- (14) 緒方亮平「緒方亮平画伯との対談」『備南合同新聞』1962年8月24日(土)

参考文献

『港町・鞆の津と画人展 一鎌田呉陽・緒方亮平一』福山市鞆の浦歴史民俗資料館 1993年
 渋谷清、谷藤史彦、大前勝信「福山の洋画(その1)」『福山市立女子短期大学研究教育センター年報3号』年報編集委員会 2006年
 『日展史』日展史編纂委員会 1982～2001年
 『光風会史 一80回の歩み一』光風会史編纂委員会 1994年
 『福山洋画史』『蔵品による ふくやまの洋画展』ふくやま美術館 1997年

【編集後記】 緒方亮平は、マチスのように窓のある室内風景を多く描いた画家です。開かれた窓からは、青々とした樹木が見え、明るい陽光が差し込むような絵です。色彩的にも緑や茶色などを使い、温かく幸せそうな家庭に見えるのです。昨年、寄贈作品の調査のため、東京・杉並のアトリエだったお宅にご子息様を訪ねた時、その居間からは絵に描かれた美しい庭がそのまま見え、まさに幸せな家庭がそこに残されていたのでした。そんなコロリスト、緒方亮平の世界をこの展覧会でご紹介します。

(学芸課長 谷藤史彦)